

## 10 龍華院大猷院靈屋の研究

筆 者 石野 茂子

### 課題

私の居住する裏山は、昔、徳川家康が掛川城を攻撃する為陣を張ったとされる掛川古城跡地が残されている。そこには天台宗長松山龍華院の他に、三代将軍家光公の大猷院靈屋がある。これはなぜ誰が建立したのか、現代に残る遺品・遺物はあるのか研究したのである。

### 本論

#### 1 掛川古城

我が家の裏山の急な坂を上り詰めた所に掛川古城跡地がある。『東海の名城を歩く』によれば、「戦国時代、海道一の弓取りとしてその名を馳せた駿河の戦国大名今川義元が、西に位地する遠江支配を進めるため、斯波氏との抗争の場であった東遠江の拠点として築いたのが掛川城である。今川氏の重臣朝比奈泰熙は、文明年間（1469～86年）頃、現在の掛川城から北東500メートルほどの独立丘陵に最初の掛川城（掛川古城）を築いた。朝比奈氏は掛川古城を拠点に東遠江の攻略を進め、今川氏の遠江支配を盤石なものとしていく。掛川古城は市街地にありながら中世城郭の様相をよく残している。曲輪配置としては、本郭を中心に西に二ノ郭、東に三ノ郭が配され、さらに腰曲輪が取り付く。北側にも曲輪が存在したが、国道により消滅した。また、現在の掛川市立第一小学校のグラウンド部分に居館が存在したと考えられる。」註①とある。

小高い丘陵の急な坂道を登りきると掛川古城跡地があり、相対する掛川城を攻防の拠点として遠望する。また、本曲輪の土塁や空堀の遺構が枯草や土砂に埋もれているが当時の面影を見ることが出来る。紅葉の名所であり南側眼下には小学校のグラウンドが広がり元気な子供たちの声が聞こえてくる清々しい場所である。（写真①）

#### 2 北条出羽守氏重

『掛川市誌』によれば「氏重は家康の養女の末子北条左衛門大夫氏勝の養子である。正保5年正月21日駿河国田中城より移封、明暦2年大猷院の神牌を申下し、新に長松山臨泉寺に靈廟を建設し、東叡山より守僧を招いて寺を龍華院と呼びこれを祀った。万治元年11月1日没。66歳。嗣子なく家は断絶した。墓は磐田郡久努村上嶽寺裏にあったが、今はその断片をもって標示としているに過ぎないと言う」註②

また北条氏重の記述については『掛川城物語』においても「第17代北条出羽守氏重在城は慶安元年（1648）より10年間禄高3万石、外に1万石 高遠城主保科弾正正直の4男（母は久松佐渡守俊勝の娘）慶長13年（1608）、遠江国浜松城3代の松平佐馬亮忠

頼の下にいた氏重は家康に召され江戸に出仕、秀忠の臣となる。その後の氏重の主な経緯をまとめると以下の通りである。

＊慶長１６年（１６１１）、下総国岩富（千葉県佐倉市）城主北条氏勝の養子となる。その後、小田原番、大坂の陣で功をあげ、従五位下出羽守に叙せられ、日光山の普請役や伏見城番を勤めた。

＊元和５年（１６１９）遠江国久能（袋井市）に転封。その間にも数々の要職に任じながら三代将軍家光に仕え、

＊寛永１２年（１６３５）には「大番頭（幕府軍役の中心）」という重責に抜擢された。

＊慶安元年に駿河国田中城より掛川城に入封。在城中、特筆すべき事項は、かつて家康が掛川城を攻めたときの本陣「天王山」に、三代将軍家光公の霊廟を祀り龍華院を創建し徳川家の聖地としたことである。これは北条氏重が徳川家康、秀忠、家光の三代に仕えた将軍家への敬慕の念とみるべきであろうか。

＊万治元年（１６５８）１０月１日没、享年６４。しかし氏重は男子に恵まれず、「無嗣断絶・除封」としてついに廃絶となった」註③

北条氏重の系図について調べてみた。『掛川市史』第５章 掛川藩の成立と展開

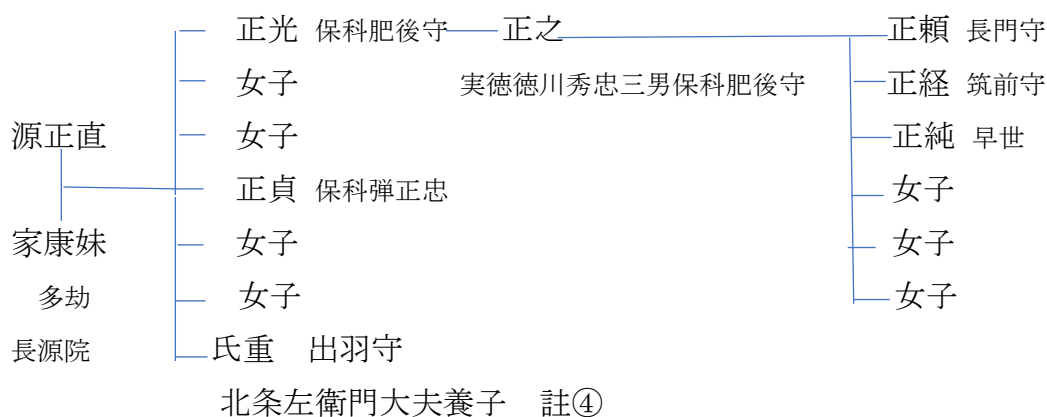
「北条氏系図」（１）

頼光 — 頼国 — 頼綱 — 国正 — 国時 — 国盛 — 国綱 — 国氏  
摂津・美濃守 摂津・美濃守 山形三郎 齐院次官落合三郎 山形蔵人 山形六郎次郎蔵人

— 国親 — 国基 — 基宗 — 基仲 — 基成 — 親成 — 繁成  
福島三郎 福島五郎 福島左近將監蔵人 福島五郎 福島六郎 福島左衛門大夫 福島黒羽左衛門大夫

— 基正 — 正成 — 綱成 — 氏繁  
福島左衛門大夫善九郎佐渡守 福島上総介 北条左衛門大夫上総介 北条常陸介左衛門大夫  
— 氏勝 — 氏重  
左衛門大夫 出羽守  
— 新八郎  
— 善九郎  
千葉  
— 繁広 — 氏長  
安芸守

## 「北条氏重系図」(2) 保科氏関係



この系図から、北条氏重は名家保科正直の4男として生まれ、母の多劫姫は徳川家康の異父妹であり、氏重は家康とは叔父と甥の縁ある関係である。

## 3 三代将軍徳川家光

三代将軍家光公の誕生は1604年（慶長9）7月17日。『徳川實紀』第一篇によれば「巳刻前右大將の北方御産平らかにわたらせたまひ。こと更男御子生れ給ひしかば。上下の歡喜大方ならず」註⑤

男子誕生の喜びが城内に知れわたり正に蜂の巣をつつく大騒ぎである江戸幕府三代将軍となる徳川家光は徳川秀忠の次男として江戸城に生まれたのである。この報に接した家康はたいそう喜び、家康自らの幼名である竹千代と名付けたと言われている。しかし、「家康の嫡孫に生まれながらも家光の前半生は安穩としたものではなかった。愛情薄い両親のもと鬱屈した幼少期を過ごし、弟秀長との相克に苦しむ。春日局の献身と家康の裁断で三代将軍の座についた家光は、大御所秀忠や忠臣たちの薫陶により、英邁闊達な君主へと成長していく。徳川第15第将軍のうち、正室の所生は家光一人である。そのため、生まれながらの将軍と呼ばれた」註⑥

大御所秀忠や家臣らに支えられ将軍職を全うする中、秀忠が家康の遺言により下野の日光山に建てた小堂に、家光が亡き祖父の愛情を思い参拝していたのである。秀忠死後1634年（寛永11）に家光は日光に参拝して尊敬する祖父の為に社殿の大規模改築を行なった。なぜ家光は大改築をしたのか、「家光が東照大権現・家康を深く信仰した理由は家康の忌日と家光の誕生日がともに17日であり、大権現と家光は一体のものであり家光はその分身であるものとする。家康から直接蒙った恩である。世継ぎ決定にあたって家康が家光を秀忠の後継と定めたことである」註⑦

1617年（元和3）4月に社殿が完成し、現在の社殿群はそのほとんどがご遷座から20年後の1636年（寛永13）に建て替えられたものである。（これらの社殿群は1999年（平成11）12月「世界文化遺産」に登録）北条氏重は三代将軍家光に仕え、1635

年（寛永12）に大番頭の重責に抜擢された。その後順調に加増、転封し、掛川城17代の城主となり10年在城したのである。北条氏重の在城時の偉業は、掛川古城跡地へ城の安泰を願い、幕府に願い出て三代将軍家光公の霊屋を建立したことである。（写真②）

### 3 龍華院大猷院霊屋建立

建立された霊屋は、「文化15年（1818年）に春日厨子を残して焼失したが、文政5年（1822年）に再建される。明治以後は藩の保護を失い檀家も無く30年余の無住が続く寺域建物は荒廃した。霊廟は、極彩色で宝形造りの方三間、向拝一間、棧瓦葺の小ぶりなお堂だが江戸初期の霊廟建築を良く表現する県指定文化財」註⑧

とあり、小規模ながら家光公が祖父家康のために建立した日光東照宮に似た装飾であったと思われる。今の建物は1822年（文政5）に焼失、再建されたものであるが、2022年（令和4）11月19日三代将軍家光のご遺徳を偲び200年ぶりに御霊屋が公開されたのである。しかし霊廟完成から2年後氏重はこの世を去ったのである。戸塚和美氏講演資料に「末期養子とは、大名等の当主で嗣子のない者が事故や急病などで死に瀕した場合、家の断絶を防ぐために緊急に縁組された養子のことで、あくまでも緊急避難的措置でした。江戸時代のはじめ頃までは、末期養子は禁止されていたため、世継ぎがないことによる改易が改易全体の4割を占めていました。慶安4年（1651年）には末期養子の禁止が緩和され、50歳以内の者に限り認められるようになりましたが、氏重は高齢のため適用されませんでした」註⑨

### 4 北条氏重の菩提寺

嗣子断絶となった北条氏重はどこに葬られたのか。北条氏重の菩提寺を調べたところ、『掛川誌稿』に「廢上嶽寺 北条家ノ菩提所ニテ、五間町ノ西二瀬川ノ東ニアリシ也、承應元年ノ免定二、高一石六升一合、上嶽寺屋敷引トアリ、其後正徳二年ノ頃、山名郡北原川ニ移ル、此寺今ニ北条氏ノ遺物アリ」註⑩

と記述され、「北条家の墓所は、掛川市大池、二瀬川東にあったとされる」とあった。城主の病死により、城から2キロ余り西の二瀬川に菩提寺上岳寺が建立され墓地が造られたのである。そこで墓地がどの辺りか訪ねてみた。掛川城から旧国道1号を西進する事1.6キロ余り、二瀬川の山田八百屋交差点の信号機を右折し、直進200m西側一帯倉真川堤防沿いまでに二瀬川区・七日町区の広大な土地に公民館・屋台小屋・駐車場・民家が広がっていた。（写真③）土地の古老を訪ねたが300年前の事で皆無であったが、しかし、明治の初め頃、この辺りに競馬場があったと言う。二瀬川公会堂の東側に立派な馬頭観世音菩薩が供養塔として区民に守られ鎮座していた。『掛川誌稿』によれば、この二瀬川東にあった上岳寺は北条氏重が他界した1658（万治元）から54年後廃寺となり、1712年（正徳2）

山名郡北原川に移るとあった。移転先は、山田八百屋交差点の信号機を西進、旧国道1号を4.6K走行、袋井市との市境の同心橋を渡り最初の信号機を右折して直進する事500m余り、東名高速道路の高架を越してすぐ右折すると最乗山上岳寺があった。時代の変遷に伴い静かな山里に移転したにも関わらず東名高速道路が山門のすぐ前を通過しようなどとは当時としては想像もつかなかったはずである。寺の門前に東名高速道路が開通し、しかも道路面と本堂前庭との高さが一緒にフェンス一枚隔てているだけで寺は昼夜疾走する自動車の騒音に悩まされ、何時伺っても住職の姿がなかったのである。本堂の伽藍は大きくはないが、薨の美しさが目をひく堂である。(写真④)

本堂の西側の道を上ると右手に北条氏重の墓苑があり、本堂の真裏にあたる場所である。広さ100平方mの墓域に三基の墓碑が並び、墓碑といっても今は土台の部分だけで破壊された状態の石が雑然と積み重ねられているのである。江戸末期の安政地震で倒壊し、再建されずに今日に至っている。看板によると、(写真⑤)

中央が北条氏重の墓、右に室(妻)左に主君氏重の死に殉じた家臣河野作十郎の墓とされている。(写真⑥) この三基の墓碑は、破壊された状態で石が雑然と積み重ねられたままである。その崩れた三基の墓碑の前に上岳寺第31世大徹貫道大和尚が1996年(平成8)9月供養塔を建立したと記名されている。この上岳寺には北条氏重の文書が残されている。その内容は『遠江武将物語』によれば、「上岳寺には氏重の画像と共に河野作十郎の画像も所蔵されている。縦位置に描かれているその肖像はみるからにりりしい若衆姿にえがかれており、像の上部に(作十郎、主君に殉ず)とあり、時に20歳の青年であった。上岳寺文書の中に、大岡越前守が氏重菩提のためにと祠堂料として金貳拾両の金を寄附したことをしたためた寄付状が残されている。大岡越前守忠相といえは大岡裁きで有名な江戸町奉行であり、1万石の大名となった名幕臣である。その大岡越前が、上岳寺に対し20両の祠堂料を寄附したのは、おそらく先祖にあたる大岡美濃守に氏重の末娘が嫁いだという縁故関係によるものであろう」註⑪

ここで記載の大岡越前守は大岡越前守忠相の事であり、『大岡忠相』人物叢書より、「忠相の実父忠高の妻は、北条出羽守氏重の4女であった。『寛政重修諸家譜』によれば北条氏重は遠江国掛川3万石の藩主で5人の娘がいた。氏重自身は保科弾正忠正直の4男であり、生母は久松佐渡守俊勝の娘で、家康の異父妹に当る」註⑫

とある。大岡越前守忠相からすれば、実母が氏重の娘であり、その母の実家が嗣子断絶となったことに対して祠堂料を寄附した寄付状が残されているものと思われる。

## 5 長松山龍華院

前述までの資料により、北条氏重は掛川古城跡地を徳川の聖地とする為、龍華院を1655年(明暦元)創建し、開基は北条氏重、開山は東叡山(寛永寺)元光院より慶侃が招聘さ

れた。翌年、1656年（明暦2）大猷院殿霊屋を建立したのである。そのため歴代住職の墓地は掛川城から南西方向の長谷の里、宝珠山玉湊寺春光院（現掛川市役所南側）に祀られたのである。

龍華院第20代住職の海野榮久氏は、1978年（昭和53）6月末着任早々、掛川市をはじめ関係各位の理解を得て市有地にある歴代住職の墓地の発掘調査をし、龍華院に移転させ、掛川市の歴史文化の一環として大切な資料として縁故の地龍華院境内御霊屋北側に遷座させたのである。春光院は初代の墓地埋葬から300年余、廃寺後境内その他山林、田畑は民有地となり現在に至っているが、墓地はその特異性から残され市有地であったため大掛かりな発掘調査が行われたのである。当時、海野榮久住職から「300年の歳月は、荒れ果てた墓地の開伐作業、解体作業、墓石の解体、3メートルに及ぶ36基の墓の掘り下げ作業等の過酷な作業だった」註⑬と聞いており、1979年（昭和54）3月までに龍華院守僧関係者を含む40基すべての墓を遷座整備し、（写真⑦）3月30日に遷座慰霊祭を終えたものである。

## 結論

掛川城は、掛川古城を含め32代の城主が在城し、そのうち17代城主が北条氏重であった。徳川家康が陣を張った掛川古城跡地を徳川の聖地として龍華院を創建、開基となり、東叡山元光院から開山（初代）慶俔を招聘した。徳川秀忠、家光、家綱三代に仕えた氏重は自分を取り立ててくれた家光公に特に恩義が厚く御霊屋建立は、家光公が尊敬する祖父の為に豪華絢爛な日光東照宮建立に思いを馳せたからである。家康が掛川城総攻撃の際、陣を張った掛川古城跡地に日光東照宮に倣い家光の霊を供養した華麗な極彩色の御霊屋建造は、掛川城子の方角となり鬼門除けの場所として建立されたのではないだろうか。

その理由は、嗣子に恵まれずお家断絶の回避を願い、しかし忠臣として、徳川幕府に対する強い忠誠心を誓い家光公の御霊を祀ったことである。

北条氏重建立の大猷院霊屋は北側に遷座された歴代住職の墓に守られ、この丘陵を包み込むような風の音にいつそう哀れさを感じるのである。

註① 中井均・加藤理 ed. 『東海の名城を歩く』 静岡編

（吉川弘文社、2020年）105 ページ

註② 『掛川市誌』（静岡県掛川市、1968年）1271 ページ

註③ 本田猪三郎『遠州路の史蹟探訪第5巻掛川城物語』（静岡新聞社、2006年）  
61～64 ページ

註④ 『掛川市史』中巻（掛川市、1984年）646 ページ

- 註⑤ 『徳川實紀』第一篇（吉川弘文館、1997）1 ページ
- 註⑥ 太田正男『徳川家光』（株学習研究社、2000）54 ページ
- 註⑦ 藤井譲治『徳川家光』（吉川弘文館、1981）188 ページ
- 註⑧ 『掛川市の神社・寺院めぐり』（かけがわ街づくり株、2006 年）32 ページ
- 註⑨ 戸塚和美「歴代の掛川城主―松平定行・定吉と北条氏重―掛川第一・第二地区まちづくり協議会歴史講座講演資料、2020 年
- 註⑨ 『掛川市の神社・寺院めぐり』（かけがわ街づくり株、2006 年）32 ページ
- 註⑩ 『掛川誌稿』（静岡新聞社、1997 年）61 ページ  
（上嶽寺は現在資料により上岳寺と記述する
- 註⑪ 神谷昌志『遠江武将物語』（明文出版社、1986 年）226~227 ページ
- 註⑫ 大石学『大岡忠相』（吉川弘文館、2006）9 ページ
- 註⑬ 海野榮久『まぼろしの寺春光院』（私家版、1988 年）

（写真①）掛川古城跡地/2020/07/30 撮影

（写真②）龍華院大猷院殿靈屋/2022/03/03 撮影

（写真③）二瀬川東現在地/2022/12/12 撮影

（写真④）最乗山上岳寺/2020/08/08 撮影

（写真⑤）看板/2020/08/08 撮影

（写真⑥）三基の墓碑/2020/08/08 撮影

（写真⑦）龍華院守僧を含む 40 基遷座墓地/2022/12/14 撮影



（写真①）掛川古城跡地

2020/07/30 撮影



（写真②）龍華院大猷院靈屋

2022/03/03 撮影



(写真③) 二瀬川東現在地  
2022/12/12 撮影



(写真④) 最乗山上岳寺  
2020/08/08 撮影



(写真⑤) 看板  
2020/08/08 撮影



(写真⑥) 三基の墓碑  
2020/08/08 撮影



(写真⑦)  
龍華院守僧を含む40基遷座墓地  
2022/12/14 撮影